

## 漢帝国に紐付けられた「日本史」

——歴史人物「見立て」データベースの公開へ——

Japanese tied to the Chinese Empire:  
Historical Personality Assessment Database

海 津 一 朗

KAIZU Ichiro

(和歌山大学教育学部社会科・歴史学教室)

2020年10月16日受理

## Abstract

Following Kazuo Osumi's method of linking historical figures with the method of "like", a database of historical figures is created using the classical texts of Japan and China owned by Kodansha Gakujutsu Bunko (Academic Library, Kodansha Ltd.). It elucidates the self-perception of Japanese Japan as a miniature of the Han Empire through the cases of Emperor Temmu, Kiyomori Taira, and Emperor Godaigo who identified themselves as Liu Bang, Wang Mang, and Liu Shu. In addition to this, my paper pointed out the existence of 'like' due to the birth of the causal concept of retribution. This was a global transgender 'like' that transcended national and gender boundaries. The Japanese medievalists lived in such a world.

## 序 「見立て」の歴史学の提案

マスコミ・SNSなど広報媒体を駆使した権力者の思想・情報統制に注目が集まっている。本稿では、前近代の権力者が「見立て」によって民衆統合を図った事例を紹介する。それは「日本史」の虚構の枠組みを問い直す作業にもつながると予想される。

「見立て」とは歴史上の人物・事件を、過去のそれに当て嵌めて一定の範囲に喧伝・流布させる行為である。ごく近年でも、安倍晋三前首相を、独裁者のルイ14世やアドルフヒトラーに比した討論運動が広がったのは記憶に新しい。中世史研究者の間では、細川護熙連合政権(1993-4)を建武新政に比した人も多かった(この場合細川首相は後醍醐天皇に見立てられる)〔海津一郎1995〕。このように、著名な史実と類似性を強調し、それが(広報媒体により)特定の集団の集合心性となったものが「見立て」である。類似性でなく相違性を指摘する「見立て」もあるのだが今回は考察の対象外とする。

整理すると、<主張者Aが現代人Bを歴史人物Cに見立てる>という図式になる。ここでポイントになるのは、①対象となる人物B(現代人)が共通の話題となる著名人である、②見立てられる人物Cも歴史上周知の大物である、③主張者A(含む本人B)がツールを用いて一定範囲に流布させる、この3点が「見立て」が成立する最小限の要件である。したがって、中世の「風聞」は「見立て」を成立させるが、書簡等の個人的(ないしサロンの)言説は対象から除外される(「風聞」については〔酒井紀美1997〕)。多くに共有された史実、フ

ランス革命に至るルイ14世の暴政を知るから、現政権の司法人事介入が批判されるのであり、ナチス党の巧みな議会政治コントロールを知るから、憲法改正への先蹤として推奨されたのだろう。これは、マスコミ・SNSを通じて瞬く間に内外の民衆に共有された。一方、細川内閣を後醍醐政権に比すという「見立て」は、歴史学研究者の一部に広まった理解だった。流布範囲は異なるものの、それぞれ一定の範囲、一定の期間、共有された「見立て」であることが、個人的な意見とは異なるところだろう。したがって、流布させる主体とその政治的意図も分析に際しては配慮を要する。前述の事例、ルイ14世「見立て」は内閣批判の意見書(松尾元検事総長ら執筆)中で引かれた逸話であるし、ナチス「見立て」は改憲を加速化する方法を麻生副総理がアドバイスしたもの、後醍醐「見立て」は反自民勝利謳歌の世論に対して警鐘を鳴らすため、とすべて立場が異なる。

以上のような大まかな定義のもとで、管見の「見立て」事例を集成した歴史人物「見立て」データベース(日本史編)の作成に着手した。2020年春・夏の逼塞時を用いて、和歌山県立図書館(開館)が全巻収集する講談社学術文庫の全訳注シリーズすべてを総めぐりした。本稿はその成果報告に該当するが、作業の過程で気づいた先行研究に触れておきたい<sup>(1)</sup>。

「見立て」の語を分析概念として初めて用いたのは、大隅和雄の歴史意識についての研究であろう。大隅は『太平記』人名索引の編纂作業を通じて、中世人のもつ歴史知識の体系について考え(特に漢籍のもつ比重)、

その作業は『愚管抄』『沙石集』など歴史書類や辞典類(中世語彙)に及んだ。これらの豊富な蓄積をもって、現代と歴史を、架空と史実をつなぐ提案として「…のような」「見立て」を提起した〔大隅和雄1989〕。芝居や舞台に生きる架空に『太平記』の見立てがあることの意味、見立てる主体・江戸の庶民たちにスポットが当てられている。他者からの見立てにより歴史意識をみるという研究である。これに対して、国文学の分野では、情報伝達の媒体自体に関する研究があった。『平家物語』『太平記』のもつ語りの力に特別の注目をした兵藤裕己の仕事である〔兵藤裕己1995・2000〕。『太平記』西源院本を全校注した兵藤は、その「歴史の構想」について言及して、史実か虚構かのレベルで史料批判している明治以後の歴史学を厳しく指弾した〔兵藤裕己2015〕。この点はすでに『太平記<読み>の可能性』段階で指摘されていたのだが、作られた虚構の枠組みに規定されて現実の歴史は推移する。しかも、『太平記』の語りの力は他書に比類がない。兵藤の指摘は、作品普及に加え、「見立て」の枠組みの意義について参考になる。足利義満が琵琶法師を組織して平曲により源平交代史観を流布したという。『平家物語』冒頭には平清盛熊野詣船における鱸すずきの逸話(清盛自らが周・武王の白魚に見立てて平家一門の栄華を予言するというもの)があるが、これについても大橋直義なおよしの専論がある(〔大橋直義2012〕。大橋には、寺社霊場の開創縁起や巡礼についての研究があり、諸種の史料を駆使した物語分析がある)。「見立て」は政治的な意図をもって仕掛けられており、その物語は現実の歴史を規定したと想定される。

本稿では、以上のような先行研究を踏まえつつ、歴史人物「見立て」データベースを用いて、権力者が自らを過去の人物・集団に擬えてマインドコントロールを行った事例を取り上げたい。なお本文・註の引用中に巻数ページ数(8 p133)の表記は断り書きの無い限り講談社学術文庫の丁数である。

## 1 日本史のなかの漢帝国

### —劉邦・項羽・王莽・劉秀—

紀元前202年、高祖劉邦が項羽を破って、中国を統一して長安で即位。外戚の王莽に帝位を奪われたが、25年に光武帝劉秀が再興し、220年黄巾の乱で滅亡。前後400年に及ぶ漢帝国の歴史だが、57年「建武中元二年」に光武帝が倭奴国王に遣使した『後漢書』東夷伝の記事は古代日本の知識人層に知られていたであろう。

日本が漢帝国の制度を模倣して立国したことは周知の事実であろう(律令制)。だが自らを高祖劉邦に擬え、また光武帝劉秀に擬えた権力者がいたことはあまり強調されない。しかも他者からの賛美の類ではなく、天武天皇は六国史を通じて、後醍醐天皇は改元元号を通じて天下に宣言したのである。戦争によって同族を斃

して帝位を篡奪した2人にとって、もっとも頼りになる権威が漢帝国だったことになろう。大明帝国の軍事制圧を実行した太閤羽柴秀吉に至るまで、前近代日本の支配者たちは、中華帝国のなかに自らを見立てることによって正当性を担保していた。

### ア 天武天皇(大海人皇子)の火靡

『日本書紀』卷二八「天武天皇上」(壬申紀)に「秋七月庚寅朔辛卯(中略)恐其衆与近江師難別、以赤色着衣上」(其の衆の近江の師と別け難きを恐れ、赤色を以て衣の上に着く)とあり。壬申の乱のクライマックス、東国の兵を率いて近江朝廷を襲撃する大海人皇子が、数万の衆に赤い布をつけさせた。事実上、大友の近江朝廷と大海人の吉野反乱軍とが、雌雄を分けることになった運命の7月2日の記事であり、この赤色は非常に印象深いエピソードとなる。国文学・古代史学はこの暗喩の謎解きに挑戦して、「漢の高祖が赤帝の子であると自負し、旗幟に皆赤を用いた」という『漢書』高帝紀を見出し、「天武天皇が自らを漢の高祖に擬した」と解釈した。この井上通泰説は、岩波日本古典文学大系本の『日本書紀』頭注で引かれたため広く流通した。併せて万葉集の柿本人麻呂の歌199「火の靡くがごとく」、古事記の序の「縫旗耀兵、凶徒瓦解」より、天武の軍旗が赤色だったことを補強した〔坂本太郎ほか〕。天武の王統より、日本国号を持つ「天皇」王権が発出して、本格的な律令国家が始まるという歴史学の通説的な立場にとって、天武朝の始原が漢帝国に倣った「革命」であるというのはきわめて首尾一貫した「歴史」になった<sup>(2)</sup>。天武が『日本書紀』編纂を通じて——壬申の乱をとりわけ念入りに——自己の権力を演出したのは明らかであろう。「革命」によって漢帝国を樹立した反乱軍として、吉野の軍隊を演出したのである。ここには、漢も高祖も名前を出さないが、暗喩として参戦者(篡奪者)の共通認識に刻印されていたのだろう。

### イ 後醍醐天皇(廢帝尊治)の建武

日本王朝の始原となったのが天武・持統朝なら、「武家王権」の始原<sup>(3)</sup>となったのが後醍醐の建武新政だった。後醍醐の謀反は「見立て」による権力奪取と言って過言でない。詳しくは『楠木正成と悪党』〔海津1999〕で論じたが、脆弱な反乱軍を組織して政権奪取した廢帝後醍醐は、軍事力の圧倒的不足を補うために政権のイメージ戦略、「見立て」の連発により支配層を靡かせようとした。「朕が新儀は未来の先例」とは『太平記』に引かれた革命の宣言であり、劉秀が王莽を倒して後漢帝国を回復したときの建武年号を定めた。漢帝国の時間を再現するという前例ない改元手法によって、自らも篡奪王朝・新(幕府)を成敗して即位した後漢の光武帝であると見立てたのである。このほか、尊治は生前に後醍醐の諱名を決めて「延喜聖代の治(醍醐天皇の親政)」を見立てさせ、高野山壇上伽藍小会堂に自己と等身大の愛染明王を安置して憤怒の像と化し、吉野を

本拠にして天武・持統の再起に「見立て」するなど、歴史をもちいて人心の操作を行うことに腐心した権力であった。建武政権が分裂して内戦となった時、人々が当然のように「南北朝」名称を謳ったのは、実は不思議なことだ(鎌倉時代・江戸時代などと異なり同時代にできた呼称)。だが、後醍醐が自らを後漢皇帝に見立てたことで疑問は氷解する。後漢の後に来る大分裂時代が「南北朝時代」だったことを日本の人々は知っていた。南北朝呼称は目の前の現実ではなく中国史の知識世界から生み出された。動乱自体が中国史に規定されていた可能性がある。すべては後醍醐の「見立て」が社会に流布・定着していた証左であろう。

後醍醐天皇が劉秀を自称したのは、篡奪者王莽を討伐する皇帝という「例」を重視したためだろう。また、歴史・儀礼に詳しい後醍醐は、天武が劉邦を名乗ったという始源を熟知していたはずである。後醍醐が吉野に朝廷を置いたのも、天武が吉野を本拠にして篡奪軍を起こした嘉例に学んでいる。二人の個性的な篡奪者が作った日本史の見立て「漢帝国・南北朝」は、日本の歴史意識をいかに規定したのか。

## ウ 漢帝国の敗者たち

『平家物語』諸本が、冒頭の「祇園精舎」で、猛き悪逆のものとして異朝に秦趙高・漢王莽・梁朱異・唐祿山の4人を挙名して平清盛に擬える。一方、続く巻1で清盛は、序章で引いた「鱸」の故事から自らを周・武王に見立てる。次の「禿<sup>かぶ</sup>」では、清盛が都に女装童の密偵組織をはびこらせた話がでる。関東に流布した読本系一本『源平闘諍録』(3 p74)によれば、禿は王莽の妖婦桜花の建築であるといい、清盛権力が王莽権力に比されている。このように、『平家物語』は冒頭から「見立て」の連続であり、作中ではあるが、清盛が自称した見立て(平家一門=周武王一門)、政策の類似からの世の見立て(清盛=王莽)など中国故事の暗喩が多出する。篡奪者の王莽については、平清盛を見立てる例が多いが、同じ『平家物語』中でも木曾義仲を「王莽の世」とする作者評がある(8法住寺合戦)。乱れた治世が類似していることからの連想である。漢高祖劉邦に敗れた楚の項羽には、源義平(平治物語p411)、藤原秀康(六代勝事記)、北条仲時(太平記9-6)、新田義貞(太平記17-10)、北畠顕家(太平記19-10)が当てられている。いずれも大戦に敗れた英雄的武将たちであり、「背水の陣」「四面楚歌」など戦死する状況類似から連想されている。自分は運尽き処刑された「異朝項羽」と自称したのは義平のみであり、他の見立ては作者評等である(義貞を項羽としたのは敵方の上杉三兄弟の誘り)<sup>4)</sup>。同じ『太平記』中で、新田義貞が漢高祖(蛟龍の油断)に見立てられたり、人物比定は一貫性を欠いている(太平記20-10)。むしろ個々の歴史事件の説明をする上で、中国の故事を用いることが好まれたとみるべきであろう。田舎の出来事を理解させるには中国のた

とえが早道だった。つまり、大隅が論じたように、中世の知識層にとって中国漢籍の世界こそが教養の中身であり、日本領域はごく小さな部分集合に過ぎなかった。ゆえに、中国史に紐付けることで初めて<正しい歴史>として共通理解が可能になったのであろう。

以下、歴史人物「見立て」データベースから、漢・唐・宋代の人物について見立てを列挙して日本中世の知の体系を概観してみたい。

## 2 中華帝国のなかの日本社会

### ア 女性への視線

日本史上の女性について、「見立て」の視線はどのように紐付けているのか。性別不詳や性を超えた見立て(トランスジェンダー)も広く採取する。

人物	見立て	出典
称徳天皇	不空羼索観音	愚管抄p137
皇后藤原定子	則天武后	今鏡・上p97
同	白馬寺尼則天	権記・上p226
紫式部	妙音・観音菩薩	今鏡・下p607
藤原威子	楊貴妃	今鏡・上114
白河中宮賢子	李夫人・楊貴妃	今鏡・上p328
高倉女房葵前	鄭仁基娘	平家物語 6
祇園女御	楊貴妃	今鏡・中p166
常盤御前	楊貴妃・李夫人	平治物語p472
禿の金鳥	楊貴妃姉妹	源平闘諍録 3 p74
伊東祐親娘	王昭君漢元帝后	源平闘諍録10p157
建礼門院	李[武帝]夫人	平家物語 3
同	楊貴妃	平家物語 3
同	漢の劉・阮	平家物語灌頂
同	玄奘三蔵・日蔵上人	平家物語灌頂
二位の尼	新羅僧道行	平家物語11
重衡愛人千手前	寵姫虞美人	平家物語10
藤原多子	則天武后	平家物語 1
阿野廉子	驪姫・晋献公後妻	太平記12-10
新田義貞妻	漢兵王陵の母	太平記10- 8
勾当内侍	李夫人	太平記20- 3
塩谷高貞妻	王昭君	太平記21- 8

南北朝までの事例であるが、おおよその傾向はうかがえると思う。見立てられた対象の人物は、仏神か中国人に限定されて、日本人に比されることはない。また、藤原多子・常盤などごく一部の「天下美人」を例外として、外装で見立てられることはない。死後の愛人悲嘆の様子や行動規範・境遇の共通性などが選択の理由になっている。天皇を死なせ神器を失った建礼門院と二位尼には、六道竜宮をみて仙女と契るなどの憂き目か加えられた。女性に見立てられるわけではない。

称徳天皇が西大寺観音であるという見立ては、聖徳太子・中臣鎌足・良源・菅原道真を観音の化身とする『愚管抄』の見立てである(愚管抄p126・156・150)。『平治物語』にも、藤原信西が生身観音であると唐僧

が気づいたという話が載る。紫式部については、朝家侮辱の源氏物語を書いた報いで墮地獄釵林にさまようという説に対抗して、観音に見立てる説が現れた。

「見立て」は、行いの類似性がベイスックにあり、その上で本地垂迹による化身や変身、善悪観念に基づいて選択された。だが、収集事例の少なさはさておき、楊貴妃(唐玄宗妃)・李夫人(漢武帝夫人)・則天武后などの「見立て」は意外に貧困ではなかろうか。これは、中世日本社会の中国認識ともかかわる問題であり、今少し秦・漢・唐への「見立て」を検討しておきたい。

## イ 中世日本の中国皇帝

天武の前漢に始まり、後醍醐の後漢再興で南北朝へという日本史の枠組みであるが、その他にも皇帝に見立てられた人物はいた。天武は、慈円によって唐2代皇帝太宗に見立てられており、理由は皇太子兄を討ち国家を確立したためという(愚管抄p133)。

まず、歴代の皇帝に擬されたものは次の人々。典拠史料ごとに列記し、カッコ内には見立ての根拠を略述、ページ数は講談社学術文庫の全訳本で特定した。

### ●『日本後紀』

殷の湯王・夏王禹(民政) 淳和天皇 下p244

### ●『続日本後紀』

漢孝文・魏文帝 嵯峨上皇(薄葬の前例)下p39

\* 堯許由布・漢巖光 基貞親王 自称 下p354

漢景帝・周太王 仁明天皇(皇太子排斥)下p57

漢武帝・周文王 仁明天皇(貨幣政策)下p303

天竺転輪聖王 仁明天皇(基貞上奏文)下p354

### ●『大鏡』

釈迦如来 陽成天皇(一年兄)p55

### ●『今鏡』

漢文帝 後三条天皇(質素儉約)上p254

### ●『将門記』

\* 大契丹王 平将門(新皇の勅) 自称

### ●『平治物語』

鶏国明王 源頼朝(恥を雪ぐ)p17

越王勾踐 源頼朝(会稽の恥)p442

生身観音 藤原信西(唐僧の談話)p103

\* 楚項羽 悪源太義平 自称 p411

燕安慶緒・安禄山次男 源義朝(親殺し) p279

### ●『平家物語』 覚一本

王莽 平清盛(或儒者言 禿童・篡奪野心) 1

殷の湯王(by夏桀) 平重衡(敗軍の虜囚)10

周の文王(by殷紂王) 平重衡(敗軍の虜囚)10

唐堯(唐侯⇒天子・陶唐氏)高倉天皇 3

虞舜(堯に譲られ帝位) 高倉天皇(範) 3

越王勾踐 源頼朝・義経 会稽山の敗戦の復讐11

周の武王 平清盛(熊野詣で船中の鱸故事) 1

周の幽王 平重盛(烽火逸話) 2

周の成王・周公旦 六条天皇(幼帝摂政) 2

周代侯国秦昭王[名BC307-251] 以仁王(夜討) 4

新の王莽 源義仲(天下三分) 8

沛公(劉邦) 源義仲(逆) 9

(BC209咸陽宮・秦を滅亡させ202項羽を討ち漢)

項羽(垓下の包囲・烏口で自殺)平重衡10

\* 漢の高祖劉邦 平重盛(自称 医療の拒否) 3

唐の太宗[2代李世民] 平清盛(福原遷都) 5

鄭仁基娘 高倉天皇と葵の前 6

唐玄宗皇帝(高力士派遣) 二条天皇(色好み)

唐の武宗[会昌天子] 平清盛(五台山を攻めた悪王)

藤原成親 韓信ら高祖 4 忠臣小讒訴失脚 2

<皇帝の臣下・職者>

西晋の竹林七賢263-316 平維盛

漢の四皓[秦代] 平維盛

西王母仙女(周穆王会う)・漢武帝東方朔 建礼門院

仕女横笛10

前漢の漢王武帝臣蘇武 平康頼(流刑捕虜風流) 2

同 妹尾兼康(異国囚われ) 8

同 平 維盛(敗北入水)10

前漢の武帝代の將軍李陵 妹尾兼康 8

前漢武帝官僚朱買臣BC109没故郷会稽 齊藤実盛 7

唐の太宗[2代李世民] 重臣魏徵 平重盛 3

唐玄宗皇帝護持一行阿闍梨 座主明雲(女難流罪) 2

唐玄奘三蔵学僧629天竺 建礼門院(六道を見る)灌

### ●『源平闘諍録』(平家物語前出は除く)

王莽・妖婦桜花 平清盛(禿の策) 3 p74

唐玄宗皇帝 源頼朝(楊貴妃失う嘆き) 1 下p398

殷王 文皇 平重衡(大国王の虜囚) 8 下p51

一行阿闍梨 明雲座主(楊貴妃玄宗へ讒訴) 1 下p332

### ●『続古事談』岩波新古典本

惟成弁 漢光武臣宋弘(唐国習・糟糠妻捨) 6-9

### ●『六代勝事記』岩波新古典本

呂太后・則天武后 北条政子

夏皐陶・周呂望 鎌倉將軍(悪王討伐)

### ●『愚管抄』

唐太宗 天武天皇(皇太子を討ち国作り)p133

観音 聖徳太子・菅原道真(化身)p126・150

### ●『太平記』岩波新書・西源院本

黄石公・張良 新田義貞(久米川戦兵法)10-5

楚項羽 新田義貞(広武山一騎打ち故事)17-10

漢高祖 足利尊氏(広武山一騎打ち故事)17-10

漢武帝 一宮尊良親王(愛人の絵)18-11

漢高祖・齊王某 新田義貞(蛟龍の油断)20-10

犬戎国王・周犬 畑時能の犬(恩返し)23-2

夏后・玄宗ら歴代悪王 畑時能(武勇)23-3

秦孟明視 新田義助(四条隆資諫言)23-456

始皇帝・諸葛孔明 新田義助(遠征死)23-9

玄宗・不空三蔵金鼠 足利義詮(神戦)29-5

後漢孝靈帝 後村上天皇(槐枯れ故事)34-9

宋幼帝 後村上・細川清氏(南蛮国落ち)38-12

高師直 秦穆公(厚恩の家臣が殉死)太平記26-8

●『醒睡笑』

釈迦の弟 平重盛(平家物語にありとす)272

データベース中のより、中国皇帝・諸侯(『平家物語』から臣下・学者)の事例を示した。前節の女性事例で見た通り、大半は各場面の類似にもとづくたとえであり、人格共に再現とする例は少ない。史料中で自称と判断したものには\*を付けたが、自己の宿願を述懐したものが多し。自己の政策を中国古代の政策に学び紐付ける政治家は出たが(仁明天皇・淳和天皇・後三条天皇、平重盛、源義平)、それとて全人格的な生れ変りの演出を行なった形跡はない。自ら漢帝国の歴史を再現しようという強烈な志向をもった日本人は、管見能限り天武天皇・後醍醐天皇のみである。(補注)

『平家物語』『太平記』や寺社縁起によって広められた中世「見立て」は、『醒睡笑』『きのふはけふ物語』など御伽草子・戯作によって拡散して日本中世の知識体系を作った。これを見る限り、日本中世は制度面でも文化面でも、独立した国家としての体裁を保ってはいなかったのである。しかし、一方で、漢帝国に収斂しない「見立て」が興る。武家政権の正統性を保証した「以仁王令旨」の出現である。(補注)

### 3 武家政権の「見立て」と正当性

幕府の正史『吾妻鑑』の冒頭は、以仁王令旨の「天武皇帝の旧儀・上宮太子の仇敵討伐」に倣って朝廷を打倒せよ、という号令である。源頼朝はこれに応じて朝廷を打倒しようとした。自らを令旨の天武天皇、聖徳太子に「見立て」したわけである。日本の武家政権は以後、1867年大政奉還まで、清盛の1179年の治承3年クーデターから数えて700年に及ぼんとする異端の歴史の起点を示す文書である。

皇国史観にもとづく朝廷授権論が否定されたなかで、武家政権の成立の実態とプロバガンダと、双方から真相・真実が明らかにされつつある〔川合康1996〕。

平氏政権をひとまず攔ぐとして、源頼朝の権力の初発は「治承7年」不改元号に象徴される反逆勢力が出発点であった。まさに治承寿永内乱である。「寿永2年10月宣旨」を承けて国家軍制に復帰して以後、様々な物語を創出して反逆時代の汚点の隠ぺいを計った。『吾妻鑑』ではあくまで平氏の打倒で、朝廷への反逆ではないと主張して「以仁王令旨」を読み替えた。巧みな粉飾である。『平家物語』では「以仁王の源氏揃え」として令旨を下敷きにした上で、文覚が平氏追討後白河院宣を渡したなどと付加した。「治承年号」を掲げた反逆勢力は、巧みに反平氏・朝廷護持にすり替えられた。

このような歴史の改ざんは、大海人皇子の吉野反逆集団が壬申の乱で近江朝廷を滅ぼして(実態)、その革命を『日本書紀』『古事記』神話群で粉飾して(プロバ

ガンダ)飛鳥・奈良朝を成立させたのが唯一の先蹤であろう。以仁王令旨が、「天武皇帝の旧儀・上宮太子の仇敵討伐」を掲げたのは偶然ではなかろう。令旨を引かない語り物系の『平家物語』も、三井寺僧の言で以仁王を本願天武天皇に(後白河を大友皇子に)見立てている(「永僉議」乗田坊慶秀言)<sup>(6)</sup>。令旨も院宣も跡付けの説明(事実でない虚偽)であろうが、打倒平氏のフレーム作りによって、天武天皇のような正当な後継者イメージをアピールしたものだ。

日本の武家政権が、「天武皇帝の旧儀」を自らの原点とした意味は大きい。天武天皇が日本の漢帝国の始原に位置する王だからである。それだけに、以仁王の号令の本文の史料批判について歴史学の議論を確認する必要がある。そもそも文書様式は論旨である。これを令旨と通称するのは、発給者が無品親王の以仁王だからにすぎず、最勝王以仁の「勅」を奉じたと明記された論言と言える。すでに論証されているように、1180年挙兵した関東の頼朝勢力は、反朝廷の反逆集団であり、平氏の没落した寿永2年10月宣旨によって帰順するまでの間、独自の元号(不改元号治承7年まで)を使用して勝手に所領安堵を実行した(吾妻鑑によれば相模国府にて10月23日富士川の論功行賞)。自力救済論の立場からは1180年10月を、朝廷授権説の立場からは1183年10月を「幕府成立」とする所以である。問題なのは、幕府首脳自身がこのような現実を糊塗して、あたかも当初から朝廷擁護集団だったかの如くに歴史を修正した事実であろう。以仁王の令旨は、ここで持ち出されたものに相違ない。

兵藤裕己は著書『平家物語』において、反国家集団から諸源氏蜂起へ、という過程を強調している〔兵藤裕己1998〕。このような歴史の捏造がいかなる方法で徹底されていったのかも示される。こうした提起をうけて、歴史学はどのように対応したか。以下影響力を持つ、主要な概説書をアプリオリに選びたい<sup>(6)</sup>。

以仁王をめぐる言説について、分析の際のポイントは、①以仁王令旨の有無と②真偽についての理解、③頼朝は令旨を入手したか、④鎌倉幕府神話を流布させる方途。この4点としたい。この分野の研究者の概説書を参照して、先行研究の理解を確認した〔川合康2009、五味文彦・本郷和人2007、上杉和彦2007、河内祥輔・新田一郎2011、山本幸司1998、永井晋2015・19、呉座勇一2018〕。それぞれ、武家政権の評価が異なるため、同じ解釈にも微妙な変化がある。以仁王の令旨が、反逆軍の緊急時の作文であり、いわゆる古文書上の様式や奉者を云々することに意味がないこと(「勅」「宣」に過大な意味合いを求めること含め)共通認識であろう〔上杉和彦2007〕。また、令旨の東国への発給事実も、永井晋の挙兵意志がないという説をのぞけば、一致した見解だろう。何より『玉葉』等公家日記に東国充ての宣の要旨が引用されており、1180年8月段階の

頼朝が親王宣旨による下文を発給している(真偽鑑定の要はあるが)。結論を急ぐなら、令旨の实在と頼朝への伝来は確実(月日は差置く)であり、ある時期以後に頼朝がその政治利用を放棄したとみるのが共通理解である。源氏対平家の枠組みは、いつしか自然な政治過程の中で(武家政権の内部で)選択されたように理解されている。基調は史料批判に基づいて編纂物の『吾妻鑑』、虚構の『平家物語』を部分修正しているにとどまる。兵藤の提起した歴史創作については、歴史学サイドではいまだ十分に対応できていない(兵藤説を引用するものも皆無である)。いまのところ「武家政権の成り立ちの言説伝搬」は、依然として国文学研究が主戦場になっていると言わざるをえない。

#### 4 グローバル・トランスジェンダー中世的世界

これまで行いの共通・たとえの事例を紹介してきた(分類属性「先例」「先例真逆」「類似」「比較」「倣い」)。だが、これと同じ規模で、「化身」「転生」「再生」「悪霊」などに分類される「見立て」の事例が含まれる。現代人には理解しづらい中世の時空認識にもとづく人間観である。

これまでも、仏神の化身であるという人物や、生身の仏という藤原信西が挙げされた。信西の場合は、異国からきた唐僧が姿を見て気づいたという設定になっている(平治物語p103)。

現世に恨みを持って死んだ者は、生れ変って現世および来世に宿願を果たすという因果応報の志向が現実とされた。獄死した井上内親王は、龍に化身して政敵藤原百川を蹴殺した(愚管抄p398)。菅原道真天神の祟りは、浄蔵法師の加持祈祷で防がれたという神仏の戦いの話もある(同p151)。

輪廻転生の中には、井上内親王のように意志をもって復讐する場合と、信西のように自身が何者か自覚のないものがある。主に説話集のなかに、事例が集中する。3で引いた史料と異なり、前世に中国人著名人が扱われるものは少なく、市井の人々がほとんどである。

人物	見立て(前世)	出典
清和天皇	前叡山僧(伴大納言に復讐)	古事談2-50
聖武天皇	震旦流沙船師	僧綱補任
良弁	震旦修行者	僧綱補任
宇多天皇	紀州那智行者	三僧記類聚7
嵯峨天皇	石槌山修行者寂仙	日本霊異記下39
花山天皇	大峯行者(岩窟に死す)	古事談6-64
後白河天皇	熊野宮籠蓮華房(滝尻遺骨)	吉口伝
白河中宮賢子	醍醐寺広寿	古事談2-90
頼通妻祇子	病僧・色狂	古事談2-91
先生雑役牛	東大寺別当某(寺物犯用罪)	古事談3-6
牛 仁海僧正父	(前世罪を所勞で得脱)	古事談3-68
參川入道寂昭	唐蛾眉山寂照執	古事談3-98
頼通嫡通房	重勤聖(未詳)	古事談3-100

猿丸太夫	弓削道鏡化身(巨根)	宗祇百人一首古註
聖徳太子	南岳大師慧思577没	古事談5-25
有国	伴大納言善男後身(容貌似る)	古事談6-3
緒方惟義	日向高知尾明神大蛇	平家物語8

因果応報の名の通り、前世における善行悪行が現世を規定する。花山天皇の前世を見抜いたのは著名な陰陽師の安倍晴明だが、頭痛の原因は前世の頭蓋骨が修行岩に残っているからと解いた。後白河は熊野路滝尻の前世遺骨を蓮華王院に収めた(現在遺跡あり)。仁海の父は、前世の罪を牛になることで勞役で果たして仁海への罰を避けたという。本人に前世の自覚がある場合と、まったく記憶を欠いている場合がある。「容貌似る」「色狂」など仕草や考えの類似から、他者(とくに験者や法器)により見立てられて周知とされているものがある。このような前世の者は、これまで論じた「見立て」とは振幅している領域があるはずだが区分は難しい。なによりも、異国の僧侶が妾女に生まれ変わり、最高位の僧が動物になるなど、グローバルなトランスジェンダーの変身である。これもまた、中世日本の世界観・時空観の一側面であることは疑いない。

いまひとつ悪霊となり祟りを成すケース。『太平記』には天狗道が未来を差配する事例が見える。

如意王	天狗道の護良生替未来支配	太平記26-2
妙吉侍者	峯僧正春雅(心入替)	太平記26-2
上杉重能・畠山直宗	智暁(心に依託)	太平記26-2
高 師直 忠円	(心入替)	太平記26-2

この事例は、恨みを残して死んだ者が、天狗道に交わって心に入り込んで敵対者を破滅させるというものである。如意王・妙吉の錯乱など、史上理解できない事態を説明する方途であったろう。心身を乗っ取られた点で「見立て」以上の同一性をもつ。楠木正成の「七世滅敵(報国)」など後世に喧伝されるルサンチマンのヘゲモニー装置である。

最後に説話集類の変身・悪霊・再生から。市井の民衆の事例が多い。

大和長者娘	行基菩薩(縫いし藤袴)	古本説話集下60
ただの人	竜樹菩薩(隠形薬后淫行)	古本説話集下63
播磨印南野女房	和泉国分寺吉祥天	古本説話集下62
田植え人	自作観音像	古本説話集下67
湯治の狩人	筑摩湯わとう観音	古本説話集下69
		宇治拾遺89
藤原俊綱尾張守	前世法華僧	宇治拾遺46
青き羊の白首	魏王府ケイソク娘	宇治拾遺167
溺れる女人	優婆曇多「前世契深い」	宇治拾遺174
馬に乗る女	文殊の化	宇治拾遺175
桓算供奉僧	悪霊(上皇を眼病に)	大鏡p87
朝成	悪霊(一条一族根絶やし復讐)	大鏡p270
女御寛子	悪霊(父顯光霊と道長祟る)	大鏡p300・314
肥後僧の妻	狗留孫仏(夫往生に悪魔)	発心集4-6
比叡山の牛・小童	不動の持者(夢の告)	発心集5-5

小童(牛)侍者の不動尊(極楽房に告夢)	発心集 5-5
河内守公経 沙門公経(国守に祈願文)	発心集 5-6
天狗 山寺の高徳の聖(名声名聞作仏)	発心集 8-2
橘の木の虫 老尼(復讐・隣のケチ僧)	発心集 8-8
乞食女尼 四条宮侍女(貴船呪詛)	発心集 8-9
俊家の物の怪 いえまさ父(宗通殺)	今鏡中 p456
伝教大師 再生(堂舎修造・悪僧取締)	今鏡中 p597
越中守定俊 持経僧・黒牛	今鏡下 p463
肥後守信俊(臨終往生)聖が先々世	今鏡下 p463
聖武天皇 救施観音化身 南都巡礼記	
行基 文殊化身 南都巡礼記	
婆羅門 普賢化身 南都巡礼記	
良弁 弥勒化身 南都巡礼記	

ただの人や牛飼いが、実は菩薩であり、真相を見せずに試したり、本性を現して喜憂させるという逸話。悪霊・物の怪に憑依されて貴人の夢告で事態を知る例。宇治拾遺集に載る悪い尾張守の話は印象深い。なぜか熱田神宮を攻め滅ぼす苛政を行う尾張守俊成だが、その前世は法華僧で熱田社に追放されていた(夢の告)。熱田社が減ぶのは前世の報いなのだ、当然だという国家仏教の立場からの話である。

このような宗教説話に載る逸話は、帰依することで悪心を統御できるという主張で、因果応報の前世・来世観念を拡散していく。しかもそれはグローバル・トランスジェンダーな蠱惑性を秘めており、経典にみる仏教世界とは異なる色彩を放っている<sup>(7)</sup>。

### 結 中華帝国崩壊—「見立て」の展望

本稿では、歴史人物「見立て」データベース(日本史編)を活用して、日本の権力者・文化人が中華帝国(漢～明)に擬えられる時代を復元した。とくに天武天皇にはじまる日本王権は、みずから漢帝国の統治者に模倣し、それは建武政権の後醍醐まで続く。「南北朝時代」を招いた段階で、はじめて中絶する。一方、武家政権においては、聖徳太子と天武天皇という、この国の支配者をシンボルとする新しい権威のあり方が萌芽して、「唐入り」征明戦争を企てる動きの起点となった<sup>(8)</sup>。

またこのような「行いの類似」というくたえとしての「見立て」の他に、前世・来世の因果応報観念という生れ変り(悪霊・変身・再生)にもとづく「見立て」の存在を指摘した。これは、天竺・中国を跨り、仏神・人・動物の界も超え、もちろん男女の性を超越したグローバルなトランスジェンダーの世界観だった。日本中世人はこのような世界を生きていたことになる。

前者の「見立て」(行い類似)と後者の「見立て」(生れ変り)の関係の追究は今後の課題であるが、あえて同一のデータベースで処理することによって、課題の解明に接近したい。室町以後のデータ量が欠損しており、中華帝国の崩壊(大日本帝国の自立)は見通しを述べたに過ぎない。「生れ変り」について、国文学・宗教学の

先行研究を学び直すのが急務である。今回の作業で、来世に生れ変り(ないし現世に悪霊・天狗でとどまり)、歴史に影響をもたらすという歴史観があるのはわかった。中世人が前世に縛られた存在というの痛感する。だが、過去に遡って歴史を変える、という事例はひとつも見つからない。歴史学研究にとって、時間と変革の問題はもっともベシクなものである。この点も含めて、多くの教示を承けつつ歴史人物見立てデータベースの公開を目指したい<sup>(9)</sup>。

世界史と日本史の融合の必要を日本学術会議が提案し、その結果、「歴史総合」科目が起ちあがった。これを豊かな内容に仕上げるのが研究者の課題であるが、日本がかつて漢帝国に紐付けられていた時代があったこと、その歴史意識の変化を問うことは有効な方法と思われる。「見立て」データベースのさらなる充実をめざしたい。

### 註

- (1)見立てデータベースは、①年(西暦・和暦) ②B対象人物 ③C見立て人物 ④A宣伝主体 ⑤類似根拠 ⑥出典 ⑦分類の類型の大項目を属性としている(AがBをCに見立てる)。特に重要なのが④であり、書面に残った言説の普及・共有された範囲が注意される。たとえば、六国史や『懐風藻』は、「見立て」データ数は多く個性的だが、事実上ほとんど普及していない。文学史上著名な文芸作品もサロン内での話題にとどまるものが多い。かたや式目や庭訓のごとく訓読記号を打たれて武家・商家の教科書になって世論形成を担ったものもある。⑦については本論中で触れる。
- (2)古代史研究では、ヤマト王権の段階を重視する立場の研究者が目目して、吉村武彦が、舎人日記を基にした巻二八全体で大海人皇子が前漢劉邦を擬して行動したように描かれ(赤い旗はその象徴)、天武のみでなく書紀の編者が高祖を強く意識したとする〔吉村武彦1991 P277〕。吉田孝も「漢の劉邦が楚の項羽を破って天下を取ったとき赤い幟を用いた故事」になぞらえた「革命」だった、と指摘した〔吉田孝1997・2006〕。
- (3)後醍醐政権は古い名分論理解で王家中興など理解されるが誤りである。武門の実力の圧倒する国家権力において、大日本帝国近代、さらに象徴天皇現代にいたるまで天皇制国家の原型を作ったのが後醍醐だった。建武新政の体験失くしてこの国制はありえなかった。後醍醐が幕府を倒したというのも不正確で、得宗・治天(院のこと)体制を倒したのであり、後伏見院朝廷を滅亡させた〔海津一朗1999〕。この点で、壬申の乱と何ら変わるところがない篡奪である。
- (4)作中で自称するという事例は多くない。データベースは、「人々」「○○談話」「ある人申す」「作者評」などが大多数である。藤原師長(白楽天)、平重盛(漢高祖、周幽王)、梶原景時(張良)、安達盛長(蔡征虜)、薬師寺公義(范增)。『平家物語』と『太平記』だが、平重盛はやや特異な聖人に形象される(平家物語2、3)。
- (5)以仁王の号令は、吾妻鑑と読み本系平家物語の一書(根来寺蔵延慶本)に収録される(内容に違いがある)。歴史学では、この真偽が問題とされた。
- (6)川合康は、源平交代説理解を批判したうえで、自ら奥州合戦はじめとする武家故実の活用を提起・論証する点で、兵藤説に対するもっともラディカルな批判者である。また、寿永宣

- 旨の受け入れが権限拡大につながる側面があると主張するなど、自力救済説の真骨頂を示す。河内祥輔は、武士たちが後白河の意志と誤解して「後白河上皇を守れ」スローガンと受け止めたため、頼朝が破棄したといい、木曾義仲の北陸宮擁立との関係を重視する。永井は他説とは全く異なり、以仁王拳兵自体を否定して、令旨発給がないという立場をとる。
- (7) この点については、おそらく先行研究の指摘があると思われるが、その確認は今後の課題である。

馬に乗る女(文殊菩薩化身)が、その姿から海雲比丘弟子の童を試した逸話、盗みの罪を犯し10歳で死んだ魏王府の娘が「青き羊の首首」となり相貌の類似を妻に言い当てられる逸話、溺れた女人が実は優婆塞多で前世に契った弟子に言い寄る説話いずれも『宇治拾遺集』に載るが、典型である(巻数は前出)。また、乞食女尼が前世は四条宮の侍女で、愛人が受領となった際に捨てられたために貴船で正妻を呪詛したと述懐する話が『発心集』8-9にある。因果応報を淡々と説く印象の強い史料だけに、鮮烈な色彩感覚を持つ。一般の見立てにおいても、「行いの類似」にことさら淫乱の共通性を問う傾向も注意しておきたい。

本文中にも言及したが『古本説話集』に採られた説話には中世人の嗜好を感じる。いま現地にはないが、播磨印南野女房が和泉国分寺の吉祥天化身で「口吸・まさぐ・破契・淫水桶」される対象であること(下62)、自作観音像が田植え人になってくれたため汚損していたこと(下67)、人々の夢で「あなたは筑紫のワトウ観音だ」と言われた湯治中の狩人が、その気になって弓矢を捨てて出家する話(下69、宇治拾遺89にも類話あり)。これらには、中世人ならずとも現地を訪れ体感したいという生の意識が高揚させられる。

順礼記に多出する「観音の化身」という類の言い方は、単に天竺・震旦からの使い(本地垂迹説)という意味でなく、その人が「生身の仏」である。和泉国分寺吉祥天、西大寺観音などの言い方は、より具体的に「その仏像を見れば逢える」という民衆世界の仏像観が内包されているのではなかろうか。仏像を性愛の対象とみて性交渉に及ぶという行為は、説話の世界のみでなく一般的にありえたと考えたい。中世の人々は、歴史の中にしか存在しない女帝というものを、西大寺不空罽索観音像(現存せず)のなかに感じていたはずである(愚管抄p137)。はたして美術史や建築史のなかにこのようなアプローチがあるのか、あらためて研究史の読みなおしが急務であろう。

- (8) データベースにより日本人に見立てられた事例を検索すると、全119事例。うち鎌倉時代以前の史料で2回以上重出したのは、天武天皇(5)、平将門(4)・藤原純友(3)、神功皇后(2)となっている。
- (9) 「見立て」の研究手法は、主観にもとづく歴史理解である。見立てる個人の才覚が歴史をつくる。もとより個性的なものであり、集合心性に立脚した正否が問われるとしても、恣意的なものである。本稿でも多出した慈円著『愚管抄』はその典型だろう。撰関藤原氏の擁護、九条家の優越という二点だけを価値基準にして過去を勝手に解釈・裁断した書であり「見立て」もその枠組みで行われる偏見に過ぎない。この点で、見立ての起点となる大隅和雄の研究は再検討が必要

である〔大隅和雄2002〕。註7末尾の称徳天皇(西大寺仏像)説は、「言い古された説で周知の造像時の事件」など謎めかした記述になっており、意味が不明である。おそらく中世天皇制(女帝排除)を護持するため何らかの暗喩が込められているはずである。中世人は西大寺観音をみるたびに、女帝はダメだと思わしめられたに相違ない。慈円と並んで露骨な歴史解釈をしたのが藤原行成である。『権記』中の藤原定子誹謗(上p312)や関白基経礼賛(上p226)の道長追従の「見立て」は読むに堪えない。

#### 補注

『将門記』では将門が新皇即位に際して自らを遼建国の王・耶律阿保機に見立てたと記している。漢帝国を脅かす異境の王に紐付けた点は注目されるが、一方で中国史の枠組みの中で見立てを行っている点にも注意したい。この記事については(史料の信憑性も含めて)評価を保留したい。

#### 参考文献一覧

- 上杉和彦『源平の合戦』戦争の日本史6 吉川弘文館 2007  
大隅和雄「史実と架空の間」週刊朝日百科別冊723  
『歴史の読み方10史実と架空の世界』1989  
大隅和雄『愚管抄を読む 中世日本の歴史観』平凡社 1986  
大隅和雄『信心のこころ、遁世者の道』日本の中世2  
中央公論新社 2002  
大橋直義『『平家物語』の鱈』『鳥獣虫魚の文学史—日本古典の自然観—』4魚の巻 三弥井書店 2012  
海津一郎『神風と悪党の世紀』講談社 1995  
海津一郎『楠木正成と悪党』ちくま新書 1999  
川合 康『源平合戦の虚構を剥ぐ』講談社 1996  
川合 康『源平の内乱と公武政権』日本中世の歴史3  
吉川弘文館 2009  
呉座勇一『陰謀の日本中世史』角川新書 2018  
五味文彦・本郷和人編『現代語訳吾妻鑑1 頼朝の挙兵』  
吉川弘文館 2007  
河内祥輔・新田一郎『天皇と中世の武家』天皇の歴史4、  
講談社2011 (2018再刊講談社学術文庫)  
河内祥輔『頼朝の時代 1180年代内乱史』平凡社 1990  
酒井紀美『中世のうわさ 情報伝達のしくみ』吉川弘文館 1997  
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀』5  
岩波文庫 初1965・1995  
永井 晋『平氏が語る源平争乱』吉川弘文館 2019  
永井 晋『源頼政と木曾義仲』中公新書2015  
兵藤裕己『太平記<よみ>の可能性』講談社 1996  
(講談社学術文庫再録)  
兵藤裕己『平家物語』ちくま新書 1998  
兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』吉川弘文館 2000  
兵藤裕己『『太平記』の歴史と思想』同校注『太平記』3  
岩波文庫 2015  
山本幸司『頼朝の精神史』講談社メチエ 1998  
吉田 孝『日本の誕生』岩波新書 1997  
吉田 孝『歴史のなかの天皇』岩波新書 2006  
吉村武彦『古代王権の展開』日本の歴史3 集英社1991